

## ■原著

# 総合臨地実習経験を通じた作業療法学生の 自己成長感を涵養する成因 — Focus Group Interview を用いた質的研究 —

Factor of personal-growth for occupational therapy students through clinical training experience  
— Qualitative study using the focus group interview —

宮本 礼子<sup>1</sup>, 川又 寛徳<sup>1</sup>

Reiko Miyamoto<sup>1</sup>, Hironori Kawamata<sup>1</sup>

**要 旨**：臨地実習経験が作業療法学生の自己成長感を涵養する成因を明らかにするため、臨地実習後の作業療法学生 10 名を対象に Focus Group Interview を実施した。その結果、臨地実習は学生自身の知識・技術の不足をはじめとした自身の問題点に気づく機会となっており、この気づきや変化を実感することが自己成長感につながる可能性が示された。患者や実習指導者との関係性づくりでは、学生は概ね冷静に関係性を捉えて行動しており、特に実習指導者との間では信頼関係構築のための精神的な環境づくりを求める傾向があった。また自己成長感の涵養により自身の働くイメージが確立されていくことが示唆され、将来像には実習指導者から受けた指導内容や指導姿勢が影響を及ぼすと考えられた。

**キーワード**：作業療法, 学生, 臨地実習, 自己成長感, Focus Group Interview

## I 緒言

専門職である作業療法士の養成教育では、知識・技能・情意の3領域をバランスよく備えた、社会人としても質の高い人材育成を目指している。なかでも総合臨地実習は、多様な人間関係・場所・時間の中で展開され、実習指導者の監督・指導のもと、講義で学んだ知識・技術を統合し、専門職業人としての責任や役割を認識する場であり、総合臨地実習経験を通じた学生の学びは非常に多い。総合臨地実習では対人関係に関する悩みが多く、学生は人間関係の挫折と深化を味わう中

で、人間関係の持ち方に対する自分の特徴に気づいていくとされている<sup>1)</sup>が、総合臨地実習経験での様々な思いを学生自身がどのように認識し消化しているのか、またその過程で実習経験とそれに対する思いが相互にどのような関係性を持って作用するのかについては、未だ明確ではない。

自己成長感とは、自らの努力によって苦境や困難な出来事を乗り越えられた時に敏感に感じられる<sup>2)</sup>感情であり、看護学生では実習を通しての自己成長感が職業的アイデンティティと強い関連があるとの報告がある<sup>3)</sup>。つまり実習中の状態につ

1 首都大学東京健康福祉学部作業療法学科 Division of Occupational Therapy, Faculty of Health Sciences, Tokyo Metropolitan University

いて自己理解を促し、自己成長感を感じることは、その後の職業的アイデンティティを形成する上で非常に重要と考えられる。教育的側面から考えた場合、たとえ学生の行動がある状況において失敗だったとしても、その事実を学生がどのように受け止め消化するのかを自己成長感という観点で捉えることは、総合臨地実習が学生にもたらす効果を知る上で有効と考えられる。

医療系学生に対する臨地実習経験の認識については、国内外で多くの報告が存在している。海外では、看護学生に対して実習体験に関するインタビューを実施し、無資格であることと、専門的知識・技術の不足に対する不安を学生は抱いていると述べている<sup>4)</sup>。国内の報告では、臨地実習における看護学生の自己効力感<sup>5)</sup>や、理学療法学生における臨地実習成績と情意特性の関係性が検討されている<sup>6)</sup>。作業療法分野において佐々木ら(2009)は、学生が臨地実習に抱く満足に関する要因を分析し、不満足な実習は自己の問題が実習のあらゆる場面に影響を及ぼしていると捉えているが、多くはその問題が未解決のまま実習を終えていると報告している<sup>7)</sup>。また田上ら(2008)は学生へのアンケートで、多くの学生が実習に対して“できた”という実感を伴っておらず、記録に多くの時間を割かれている実態を明らかにした<sup>8)</sup>。学生の実習に関する自己評価には、既存の自己評価尺度や養成校独自に作成した尺度を用いた報告がある<sup>9)</sup>。学生に対するフォーカスグループインタビュー(Focus Group Interview; 以下、FGI)を実施したものでは、面接技法に限定して実施しているもの<sup>10)</sup>や、実習後に実習体験を振り返るとい形式<sup>11)</sup>で行われている。FGIとは、参加者同士のコミュニケーションを利用してデータを得る、集団面接の一種であり、オープンエンドの質問を用いてその集団内の参加者同士の相互作用を活用し、深い意識と幅広い情報を引き出すことができるという特徴がある<sup>12)</sup>。そのため、実習体験の学生側の捉え方を明らかにするために用いられることが多いが、先行研究は特定の項目や領域に限定したものであり、実習全体を通じた体験の認識を、自己成長感という視点で捉えたものではない。

そこで本研究ではFGIを用い、作業療法学生が総合臨地実習全領域の経験をどのように認識し、自分自身の成長をどのように捉えているのかを質的に明らかにしたいと考えた。

## II 方法

### 1. 対象

A大学作業療法学科に在籍する実習終了後の4学年学生のうち、キャンパス内に掲示された研究対象者募集ポスターをみて研究代表者に連絡をし、研究主旨に同意を示したものの10名(男性3名、女性7名)とした。参加者の平均年齢は24.2 ± 3.7歳であった。

A大学における総合臨地実習は、2年次後期の1週間見学実習I・II(身体障害領域・精神障害領域)と、3・4年次7週間の総合臨地実習I・II・III(身障・精神・発達または高齢者)で構成されている。参加者の総合臨地実習領域と期は表1に示す。発達領域では4名のうち3名が同一施設での実習を経験しており、うち2名は同時期に同施設での実習を経験していた(表1参照)。

### 2. FGI テーマの選定

FGIのテーマを決めるにあたり、医療系分野の雑誌論文検索サイトである医中誌WEBを用いて文献研究を実施した(検索日:2010年6月15日、18日)。

「臨床実習」「作業療法」「自己」の掛け合わせは30件、「キャリア」「大学生」の掛け合わせは22件がヒットした。その中から本研究の主旨に合致するもの21件を抽出した。各文献のキーワードから意見毎にラベルを作成し、意味的類似性により分類した結果、大カテゴリーとして「臨地実習

表1 FGI参加者の臨地実習領域別人数

	I期目	II期目	III期目	計(人)
身障	3	3	4	10
精神	4	3	3	10
発達	2	2	0	4
老年期	1	2	3	6

各々の領域における実習経験人数を示す。I期～III期はA大学における実習の期を示す。

実習期間は以下のとおりである。

I期 2010年1月12日～2月27日、II期 2010年4月12日～6月5日、III期 2010年6月14日～7月31日

における自己のポジティブ要素」「臨地実習における自己のネガティブ要素」「臨地実習における自己以外のポジティブ要素」「臨地実習における自己以外のネガティブ要素」「学生の不安要素」「医療学生の職業的アイデンティティ」の6つのカテゴリーが抽出された。各カテゴリーのサブカテゴリーは表2に示した。

これらのカテゴリー分類を参考に FGI のテーマを以下の4項目に決定した。

- ①総合臨地実習を通して自分が成長したと感じる点
- ②総合臨地実習を通して感じた満足感・達成感
- ③総合臨地実習を通して気がついた自分の課題・問題点
- ④総合臨地実習は自分にとってどんな経験であったか

### 3. FGI 実施方法

対象10名を無作為に5名ずつの2グループに分け、総合臨地実習終了約3ヶ月後の平成22年10月26日、11月4日にFGIを実施した。インタビューに要した時間は、説明や休憩を含め、各グループ2時間半～3時間程度であった。FGIのファシリテーターは、研究の主旨を十分に理解し、事前に計2回にわたり本研究とは異なる参加者によるFGIの練習を積んだ学生アルバイト1名が行った。インタビュー内容は対象者の同意のもとICレコーダーに録音した。

### 4. 分析方法

FGIの分析は、長谷川らの研究<sup>11)</sup>を参考に、KJ法的手法をもちいて行った。まずICレコーダーの録音をもとに逐語録を作成し、共同研究者と内容の確認を行った後に発言内容を適切な長さに断片化した。その際、発言の文脈に沿って意味

を最小限の言葉で補った。最後に、意味的類似性によりカテゴリー別にまとめてテーマをつけた。カテゴリーはその大きさに応じて大・中・小の階層構造でまとめ、これらの階層の関係性について共同研究者との話し合いのもと整理した。なお今回は、学生が経験した内容を領域ごとでなく、領域間の共通性として見出される事柄を分析するという視点で分類を実施した。

### 5. 倫理的配慮

インタビュー中の発言はテキスト化する際に匿名化した。逐語録作成は、学生アルバイトがおこなった。なお本研究は、首都大学東京荒川キャンパス研究安全倫理委員会の承認を得て実施した(受理番号10029)。

## III 結果

学生の発言は562のラベルに分けられた。それらは185の小カテゴリーに分類され、さらに55の中カテゴリーに分類された。その中カテゴリーは10の大カテゴリーにまとめられた。各カテゴリーに分類されたラベル数を表3に示した。また各カテゴリー間の関係性を図1に整理した。

以下に、大カテゴリーごとに概要をまとめた。中カテゴリーは「」で、小カテゴリーは“ ”で示した。また( )内は実際のラベル数を示した。

#### 1. 実習指導者(Supervisor; 以下SV)との関係性

SVとの関係性についてのラベル数が155と最も多く、全体の27.5%を占めた。中カテゴリーとして「成長に導く指導」や「学生の対応に対するSVの反応」、「SVの人間性に対する思い」に関する語りが多かった。この大カテゴリー全体としては、SVへの思いや指導方法、SVの反応に関する

表2 文献研究のカテゴリー分類

カテゴリー	サブカテゴリー
自己のポジティブ要素	自己の内的成長, 知識・技能の成長, 自己と環境の活用
自己のネガティブ要素	知識・技能不足, 情意面のスキル不足, 自己認識の不足
自己以外のポジティブ要素	SV*の指導方法, SVとの関係性, 対象者との関わり
自己以外のネガティブ要素	SVとの関係, SVの能力, 環境要因の影響, 職場環境
不安要素	職業に対する不安, 成績に対する不安, 漠然とした不安, 自分の特性に関する不安, 対人不安, 自己報酬不足
職業的アイデンティティ	職業アイデンティティ, キャリア形成, キャリア教育, 職業志向性, 職業ストレス

文献研究によって抽出されたカテゴリーを示す。

\* SVは実習指導者(Supervisor)を示す。

表3 実習後 FGI 内容分析結果

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー		
自己の特性に関する気づき (92)	本来の特性に関する自己認識 (12)	強がりであるということ	(1)	
		感情表出が苦手であること	(2)	
		頑固であるということ	(1)	
		緊張しないということ	(1)	
		マイペースであるということ	(1)	
		現状に満足しないタイプであること	(1)	
		あまり深く悩まないタイプであること	(3)	
		対人上のポジティブな特性への気づき	(2)	
		自己評価パターンの自己認識 (2)	自分の能力を過小評価しがちであること	(2)
		ストレス処理パターンへの気づき (3)	安心を得るための方略に対する気づき	(1)
			ストレス因子の排除パターンを心得ていること	(2)
		対外的なキャラクターを演じていた自覚 (2)	肯定されるような人間への努力	(1)
		自分を出していなかったという自覚	(1)	
	実習生としての到達水準に関する認識 (7)	治療への流れがスムーズだったことへの自信	(1)	
		自分にしかできないことへの気づき	(6)	
	コミュニケーションに関するポジティブな認識 (3)	基本的な指摘を受けなかったことによる自信	(1)	
		自己主張できたという自信	(2)	
	コミュニケーションに関するネガティブな認識 (20)	コミュニケーション能力の不足を自覚	(14)	
		コミュニケーション上の思い込みを自覚	(1)	
		相談機会を逃したことへの反省	(1)	
		コミュニケーションのバランスに関する悩み	(1)	
	自己主張できなかったことへの反省	(3)		
自己洞察に関するポジティブな認識 (2)	自己洞察の視点を持っているという自覚	(2)		
自己洞察に関するネガティブな認識 (2)	自己洞察能力の不足を自覚	(2)		
自己の知識・行動に関する認識と反省 (22)	知識・技術の不足を自覚	(2)		
	準備不足への反省	(2)		
	検査の意味に関する理解不足を自覚	(3)		
	説明能力の不足への反省	(9)		
	介入方略を知らないことによる困惑と反省	(2)		
	思うように動けないという自覚と反省	(4)		
観察視点に関する自己認識 (15)	患者を観察する視点の不足を自覚	(9)		
	全体像を把握する視点の不足	(1)		
	固定観念や決めつけによる視野の狭さの自覚	(3)		
	疑問を持つことの困難さの自覚	(2)		
キャパシティに関する自覚 (1)	キャパシティの限界を自覚	(1)		
実習で要求されたことを消化しなかった自覚 (1)	実習上の最低限のルールを破ったという反省	(1)		
実習中の悩みと息抜き (38)	課題に対する悩み (6)	評価が進まないことによる焦り	(1)	
		留年への恐怖	(1)	
		課題自体の負荷の重さ	(4)	
	生活に対する悩み (21)	生活時間を自分でコントロールしきれない不満	(15)	
		体力的不安	(1)	
		友人と会うことによる焦り	(2)	
	実習環境上の不安 (3)	友人への気疲れ	(3)	
	生活上得ていた安息 (3)	他の実習生を比較対象としたときの焦り	(3)	
実習上得ていた安息 (5)	友人知人との電話による息抜き	(3)		
	他実習生の存在そのもの	(3)		
	友人との励ましあい	(2)		
患者との関係性 (135)	直面した問題への対応 (11)	患者の性格を考えた関わり方	(1)	
		信頼を得るための工夫	(4)	
		接触頻度の物理的増加	(6)	
	学生の対応に関する患者の反応 (39)	患者から学生への声かけ増加	(6)	
		表情変化の増加	(7)	
		親しみを感ずる行動を表出	(2)	
		共にひとつの作業を遂行	(2)	
		学生への協力が増加	(4)	
		学生の顔を記憶	(5)	
		患者が親切	(2)	
		学生との関わりを拒否	(3)	
		検査を拒否	(2)	
		検査ではなくリハビリをという要求	(2)	
		障害のため検査が困難	(2)	
		真面目に取り合わない態度	(1)	
SV への愚痴	(1)			

(つづく)

表3 実習後 FGI 内容分析結果(つづき)

大カテゴリ	中カテゴリ	小カテゴリ		
患者との関係性 (135)	患者の状態に対する学生の感情 (18)	回復過程を目の当たりにしたうれしさ	(3)	
		患者との直接的交流を通したうれしさ	(5)	
		患者との間接的交流によるうれしさ	(3)	
		子供による癒し	(2)	
		患者の心情を察しての憂鬱	(2)	
		患者に対する恐怖心	(1)	
	患者の反応に対する学生の認識 (2)	患者の病状急変に対する衝撃	(2)	
		学生への配慮から協力してくれているという理解	(1)	
	患者への関与に伴う実感 (65)	患者の本心に関する洞察	(1)	
		作業療法士の仕事の本質を実感	(20)	
		話し相手という役割の発見	(2)	
		医学的要素の回復への影響を実感	(1)	
		改善は自然治癒ではないのかという感覚	(3)	
		改善は薬や個人因子の影響という感覚	(1)	
		信頼関係を築けたという実感	(14)	
		自分の関与が患者に良い影響を与えたという実感	(5)	
		自分の関与と患者の変化を安易に結び付けられない冷静さ	(9)	
		リハビリ自体の効果に対する確信	(1)	
対象者の価値や習慣を知ることの困難さ		(1)		
多くの患者を見られた喜び		(1)		
漠然とした自信		(1)		
対象者を理解するうえでの視点の変換		(1)		
現実場面での妥協を体験	(1)			
現実場面での妥協を体験	(1)			
他職種との立場の区別の困難さ	(2)			
介助者とのかわりの重要性	(1)			
関与した障害の特性の一部を理解したという感覚	(1)			
直面した問題への対応 (3)	積極的な関与	(1)		
	問題の認識を切り替え	(2)		
	十分な賞賛	(10)		
学生の対応に関する SV の反応 (35)	不十分な賞賛	(7)		
	記録内容の不備を指摘	(1)		
	SV からの意見の表明がない困難さ	(2)		
	モチベーションに対する一方的な評価	(1)		
	社会人としての一方的評価	(1)		
	不得手なモデルの使用を推奨	(1)		
	大学の講義内容に関して質問	(1)		
	相談しないことに対する叱責	(2)		
	理由のわからない指示・課題のやり直し	(9)		
	SV との関係性 (155)	成長に導く指導 (72)	SV の学生に対する気遣いを実感	(16)
学生の特性を考えた上での関与			(18)	
自分のために時間をかけてくれているという実感			(11)	
自由度を与えられていることによる信頼を実感			(8)	
一方的ではない関与			(2)	
適切なタイミングでの関与			(4)	
信頼関係の形成			(3)	
学生との信頼関係形成のためのきっかけ提供			(1)	
患者と学生の橋渡しの役割			(1)	
知識・技術の補完サポートによる満足			(2)	
課題中心ではない指導			(1)	
学生の心理的サポートの重要性			(3)	
指導するための人的環境づくり			(2)	
SV の人間性に対する思い (21)			ノリの良さ・親しみやすさ	(6)
			フェアな指導姿勢	(1)
	社会人として尊敬しうる要素の発見	(5)		
	自己研鑽の姿勢	(5)		
	経験の豊富さ	(1)		
	思考のぶれなさ	(1)		
SV の対応に関する学生の感情 (10)	職業人としてのコミュニケーションスキルの高さ	(1)		
	患者からの信頼	(1)		
	言葉による傷心	(2)		
	仔細すぎるレポート指導	(1)		
SV の反応に対する学生の認識 (14)	指導の厳しさ・高圧的	(3)		
	時間をかけてもらえなかったという残念さ	(4)		
	受け入れられたという実感	(2)		
	受け入れてもらえなかったという無念さ	(2)		
	関係性が築けなかったという反省	(2)		
	相性の重要性を実感	(1)		
	キャラクター・指導方針の相容れなさを実感	(7)		

(つづく)

表3 実習後 FGI 内容分析結果(つづき)

大カテゴリ	中カテゴリ	小カテゴリ	
環境への気づき (23)	物理的環境の充実を実感 (2)	恵まれた IT 環境	(2)
	職場の雰囲気を実感 (3)	良い雰囲気 居心地の悪い雰囲気	(1) (2)
	時間的自由度に関する気づき (5)	一日の中での時間的余裕への気づき 時間的余裕のなさの実感 時間的制約の実感	(2) (2) (1)
	環境上の制約やルールへの気づき (8)	環境的制約の実感 施設内ルールに沿った行動の必要性	(3) (5)
	現場の環境で要求されるスキルの実感 (5)	患者の転院・退院への対応を体験 環境への慣れ 現場の要求水準と自己の知識・経験のギャップ 他職種連携の大変さを実感	(1) (2) (1) (1)
	知識を得たという実感 (2)	知識を学ぶ機会	(2)
	知識を得なかったという思い (1)	知識は学ばなかったという思い	(1)
	人間的成長の実感 (5)	社会人としての基本的態度が身につく機会 精神面の向上をはかる機会	(2) (3)
	職務に従事できる充実感・楽しさ (4)	治療の楽しさを実感 集中した期間で OT 業務に当たれたことへの充実感 学んだことを実践できる場としての充実感	(1) (1) (2)
	現場での対応に関する確信 (2)	最低限の検査でよいという確信 職場の雰囲気の重要性	(1) (1)
臨地実習に対する実感 (26)	実習の大変さを実感 (4)	指導者の要求水準の高さを実感 実習の大変さを実感	(1) (3)
	実習終了の達成感 (5)	実習自体を無事に終えたことに対する達成感	(5)
	実習体験に対する不満・不安 (3)	できないことをやらなければならないというストレス 知識のよりどころが明確でないことに対する不安 相対的な方法で患者を理解することの必要性	(1) (1) (1)
	自信のなさに起因する問題 (4)	自分の関与と患者の変化の結びつかなさ 対象者との関わりに関する自信のなさ	(2) (2)
	時間的制約に起因する問題 (2)	プログラム立案に関する消化不良	(2)
問題 未解決な (7)	人間関係に起因する問題 (1)	面倒な人間関係	(1)
	仕事内容に対する混乱 (5)	仕事内容に関する不明確さ	(5)
	仕事内容の明確化 (3)	経験に基づく技術の重要性 徒手的な技術に限らない可能性 自分を“道具”として使うことの実感	(1) (1) (1)
	自身のモチベーションの変化 (2)	OT という仕事へのモチベーション増加	(2)
認識の変化 (23)	仕事に対する自分の変化を実感 (13)	仕事への認識が変化したことの実感	(13)
	自身への戒め (2)	謙虚な姿勢の保持	(2)
	自己研鑽のためのプラン (18)	知識・技術の獲得 内面的成長への期待 幅広い視野の獲得	(9) (2) (7)
今後の方針 (20)	将来への希望 (1)	一人前になることへの憧れ	(1)
	OT としての取り組み姿勢 (8)	対象者中心という考え方を重要視 多方面での活躍 臨床で使える技術の重視	(4) (1) (3)
自分の将来像 (43)	SV としての将来像 (21)	学生との信頼関係を重視 学生の特性を考えた上での関与 学生指導に十分な時間を割くこと 学生を受け持たたくない心理	(8) (3) (7) (3)
	将来への不安と焦り (13)	SV になれるのかという不安 みえないビジョンに対する不安 理想と現実のギャップに対する不安と焦り 環境に慣れることへの漠然とした恐怖 仕事そのものへの消極的思考	(2) (5) (4) (1) (1)

総ラベル数 562

括弧内の数字は各カテゴリのラベル数を示す。

ラベルが多い一方で、「(SV との間で)直面した問題への(学生自身の)対応」については発言数が3ラベルと少なかった。

①「成長に導く指導」

“学生の特性を考えた上での関与(18)”といった

実際に受けた指導の良い面に関する語りのほかに、“SV の学生に対する気遣いを実感(16)”し、学生を導く指導のあり方について意見が多く挙げられた。

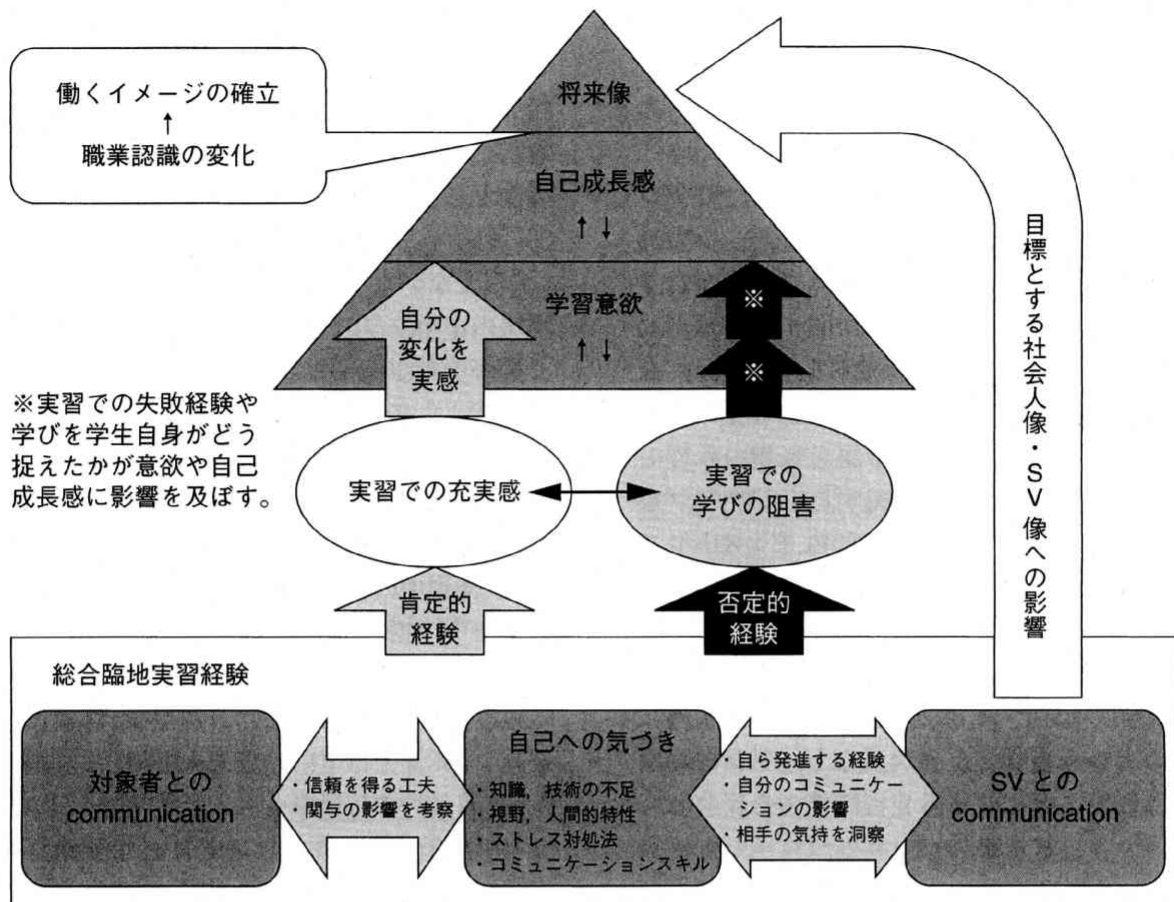


図1 臨地実習経験と自身の将来像形成の関係図

学生の総合臨地実習経験と自身の将来像形成までの関係性を示す。矢印の中の言葉は、各々の相互関係の中で学生が気づいた内容や行ったことを記載している。黒矢印は学生の中で否定的経験として推移し、消化されずに残る可能性があるものを示している。

## ②「学生の対応に対するSVの反応」

このカテゴリーの下位カテゴリーでは、“十分な賞賛(10)”を受けた経験と、その一方で“理由のわからない指示・課題のやり直し(9)”の経験が挙げられた。

## ③「SVの人間性に対する思い」

SVの人間性に対して“ノリの良さ、親しみやすさ(6)”を感じ、また“社会人として尊敬しうる要素の発見(5)”や、“自己研鑽の姿勢(5)”を感じとっていた。

### 2. 患者との関係性

実習地によりサービスを提供する相手は“患者”“対象者”“クライアント”と呼び名が変わるが、本論文の結果では学生の発言を重視し“患者”と統一した。

患者との関係性に関するカテゴリーはラベル数

135で、全体の24.0%であった。「患者への関与に伴う実感」や、「学生の対応に関する患者の反応」のラベル数が多く、次いで「患者の状態に対する学生の感情」が続いた。一方で「患者の反応に対する学生の認識」はラベル数が2つと少なかった。

「直面した問題への対応」は、対SVよりも多くの語りが得られた。

### ①「患者への関与に伴う実感」

“作業療法士の仕事の本質を実感(20)”し、“信頼関係を築けたという実感(14)”が多く挙げられた。

### ②「学生の対応に関する患者の反応」

学生は、“表情変化の増加(7)”“患者から学生への声かけ増加(6)”“学生の顔を記憶(5)”を患者の反応としてキャッチしていた。

### ③「患者の状態に対する学生の感情」

学生は、“患者との直接的交流を通したうれし

さ(5)” “患者との間接的交流を通したうれしさ(3)” “回復過程を目の当たりにしたうれしさ(3)”を感じていた。

### 3. 自己の特性に関する気づき

自己の特性に関する気づきと命名したカテゴリーは92ラベルあり、全体の16.4%を占めた。この大カテゴリーには13の中カテゴリーが含まれていた。「自己の知識・行動に関する認識と反省」, 「コミュニケーションに関するネガティブな認識」, 「観察視点に関する自己認識」, 「本来の特性に関する自己認識」, が多く語られていた。一方で「コミュニケーションに関するポジティブな認識」や, 「自己洞察力に関する認識」, 「ストレス処理パターンへの気づき」は, ラベル数が少なかった(表3参照)。

#### ①「自己の知識・行動に関する認識と反省」

“説明能力の不足への反省(9)”や, “思うように動けないという自覚と反省(4)”など, 具体的場面で要求されたことに対する自己の能力を反省していた。

#### ②「コミュニケーションに関するネガティブな認識」

“コミュニケーション能力の不足を自覚(14)”し, “自己主張できなかったことへの反省(3)”をおこなっていた。

#### ③「観察視点に関する自己認識」

“患者を観察する視点の不足を自覚(9)”し, “固定観念や決めつけによる視野の狭さの自覚(3)”していた。

#### ④「本来の特性に関する自己認識」

自己の特性に関しては小カテゴリーが8つ存在した。最も多かったのは“あまり深く悩まないタイプであること(3)”, 次いで“感情表出が苦手であること(2)”, “対人上のポジティブな特性への気づき(2)”が挙げられた。

### 4. 自分の将来像

自分の将来像に関するカテゴリーはラベル数43で, 全体の7.7%であった。中カテゴリーは「SVとしての将来像」, 「将来への不安と焦り」, 「作業療法士(Occupational Therapist: 以下OT)としての取り組み姿勢」, 「将来への希望」の順にラベル数が多かった。

#### ①「SVとしての将来像」

学生は, “学生との信頼関係を重視(8)” “学生指導に十分な時間を割くこと(7)” “学生の特性を考えた上での関与(3)”をできることを, 自分の将来像として挙げていた。

#### ②「将来への不安と焦り」

“みえないビジョンに対する不安(5)” “理想と現実のギャップに対する不安と焦り(4)”などが多く挙げられた。

#### ③「OTとしての取り組み姿勢」

学生は, “対象者中心という考え方を重要視(4)” “臨床で使える技術の重視(3)”するOTを目指したいと語った。

### 5. 実習中の悩みと息抜き

実習中の悩みと息抜きに関するラベルは全部で38であった。中カテゴリーの中では「生活に対する悩み」が最も多くを占め, 次いで「課題に対する悩み」 「実習上得ていた安息」が挙げられた。

#### ①「生活に対する悩み」

“生活時間を自分でコントロールしきれない不満(15)”が多く挙げられ, 実習中の生活サイクルの非日常性が伺えた。このほか“友人への気疲れ(3)”というものも挙げられた。

#### ②「課題に対する悩み」

“課題自体の負荷の重さ(4)”が最も多かった。このほか“評価が進まないことによる焦り(1)”と“留年への恐怖(1)”が挙げられた。

#### ③「実習上得ていた安息」

“他実習生の存在そのもの(3)”, “友人との励ましあい(2)”の2種類の 방법으로, 学生は実習中安息を得ていた。

### 6. 臨地実習に対する実感

「人間的成長の実感」, 「実習終了の達成感」, 「職務に従事できる充実感・楽しさ」, 「実習の大変さを実感」が中カテゴリーの中でも多く挙げられた。

#### ①「人間的成長の実感」

“精神面の向上を図る機会(3)” “社会人としての基本的態度が身につく機会(2)”として, 学生は自らの成長を認識していた。

#### ②「職務に従事できる充実感・楽しさ」

“学んだことを実践できる場としての充実感(2)” “治療の楽しさを実感(1)” “集中した期間で



OT業務に当たれたことへの充実感(1)”が挙げられた。

#### 7. 仕事に対する認識の変化

「仕事に対する自分の変化を実感」が最もラベル数が多く、次いで「仕事内容に対する混乱」, 「仕事内容の明確化」が挙げられた。

##### ①「仕事に対する自分の変化を実感」

小カテゴリーは1つであったが, “仕事への認識が変化したことの実感(13)”を学生は実習後に感じていた。

##### ②「仕事内容に対する混乱」

“仕事内容に関する不明確さ(5)”が挙げられた。

##### ③「仕事内容の明確化」

②とは逆に明確になったとの意見が挙がり, 具体的には“経験に基づく技術の重要性”や“自分を道具として使うことの実感”, “徒手的な技術に限らない可能性”が語られた。

#### 8. 環境への気づき

「環境上の制約やルールへの気づき」, 「時間的自由度に関する気づき」, 「現場の環境で要求されるスキルの実感」の順にラベル数が多かった。

##### ①「環境上の制約やルールへの気づき」

“施設のルールに見合った行動の必要性(5)” “環境的制約の実感(3)”といった, 実際の現場体験を通じた環境への気づきが挙げられた。

##### ②「時間的自由度に関する気づき」

“一日の中での時間的余裕への気づき(2)” “時間的余裕のなさの実感(2)”と, 相反するカテゴリーが挙げられた。

##### ③「現場の環境で要求されるスキルの実感」

“環境への慣れの必要性(2)” “現場の要求水準と自己の知識・経験のギャップ(1)”が実感として語られた。

#### 9. 今後の方針

2つの中カテゴリーで形成された。「自己研鑽のためのプラン」が最も多く, 次に「自身への戒め」が挙げられた。

##### ①「自己研鑽のためのプラン」

小カテゴリーは“知識・技術の獲得(9)” “幅広い視野の獲得(7)” “内面的成長への期待(2)”であった。

##### ②「自身への戒め」

小カテゴリーは“謙虚な姿勢の保持(2)”のみであった。

#### 10. 未解決な問題

「自信のなさに起因する問題」, 「時間的制約に起因する問題」, 「人間関係に起因する問題」が挙げられた。

##### ①「自信のなさに起因する問題」

“自分の関与と患者の変化の結びつかなさ(2)” “対象者との関わりに関する自信のなさ(2)”は, 実習中に解消されなかった問題として語られた。

##### ②「時間的制約に起因する問題」

“プログラム立案に関する消化不良(2)”のみが挙げられた。

## IV 考察

FGIの結果から, 臨地実習での対象者あるいはSVとのコミュニケーションによって得られた自らの特性や能力に対する気づきが, 実習における学習意欲と自己成長感に影響を及ぼしていると考えられた。また自己成長感の涵養により自身の働くイメージが確立されていくことが示唆された。

臨地実習経験を通じた自己への気づき, 対人関係における気づき, 仕事をする自分のイメージという観点で, 詳細を以下に考察する。

### 1. 臨地実習経験を通じた自己への気づき

今回の結果から, 学生は総合臨地実習の経験を通し要求されるスキルの本質を目の当たりにし, 自身の現状を省みていることがわかった。村田<sup>13)</sup>は, 『実習中に学生は, 障害を持つことで混乱しているクライアントに心の内を語られ, 処理できずに悩んだり, 何もできない無力感を持ち, 知識や技術の不足を実感する。このような状況では実習の達成感が得られず, 学習意欲が阻害され, 学習の危機に陥る』と述べている。今回の我々の結果から, 学生はたしかに知識・技術面の不足に直面しており, その経験から職務に従事する際の自身の問題点に気づいていたと考えられる。そして気づきそのものを実感することが, 臨地実習に対する実感として中カテゴリー「人間的成長の実感」・「職務に従事できる充実感・楽しさ」に挙げられたような自己成長感を涵養する成因になって

いると解釈することができる。

また未解決な問題として「自信のなさ」に起因する問題が挙げられたことから、「無力感」や「処理できない問題」を抱えたままでは、臨地実習での自己成長感を得にくくすると捉えることができる。作業療法学生にとって半年にわたる総合臨地実習は、生活時間を自身でコントロールできないことをはじめ、留年への恐怖も相まって人生における危機的状況を生んでいると思われるが、こうした危機的状況下において自分の情緒的体験を自分一人で内省し、その要因を分析し、問題解決をするのは容易ではない<sup>14)</sup>。したがって、直面している問題を友人や周囲の人間と共有する機会を持つことが、単にストレスを軽減するのみならず、問題を受け止め自己成長感を涵養する手助けとなると考えられる。

## 2. 対人関係における気づき

患者との関係性において学生は中カテゴリー「患者への関与に伴う実感」に分類されているように、困難さを知ると共に自身の役割を前向きに捉える傾向が見られた。また、相手の思いの洞察に関する発言は少なかったものの、小カテゴリー「信頼関係を築けたという実感」では、信頼関係構築のために学生から接触頻度の増加を図るなど、信頼を得るための工夫をしていた。そうした自分の関わりを、「自分の関与と患者の変化を安易に結び付けない冷静さ」と捉えていたことから、学生は自身の行動が患者に与える影響の詳細な分析はしていなかったが、漠然と関わりの影響を考えることの重要性に気がついていたと考えられる。

SVとの関係性では、SVの学生への対応や、指導への希望が述べられる一方で、自身のコミュニケーション特性と関係性構築の問題に直接対応するラベルは得られなかった。また医療職にとって非常に重要とされる、対話を通じた信頼関係の構築<sup>15)</sup>について、学生は信頼関係構築の重要性を実感しているものの、関係性を作り上げる際にはSVによる精神的な環境づくりが必要であると考えていることが推察された。一般に対面コミュニケーション時は、バーバルな情報よりもノンバーバルな情報がよりキャッチされる<sup>16)</sup>傾向があるが、実習指導ではさらに学生自身がSVに評価さ

れている前提がある。学生はSVの表情や視線を過敏に、時に誤った形で受け取っており、緊張を取り除く意味で話しやすい環境を暗に求めている可能性がある。そのため関係性構築時の自身の対応を詳細に自己分析することが難しかったのかも知れない。

## 3. 職業認識の変化と“仕事をする自分”のイメージ

今回語られた職業認識の変化は中カテゴリーの「仕事内容の明確化」と「仕事内容に関する混乱」という対極なものだった。これは、病院・学校・施設といった様々な場で実習をしている作業療法学生ならではの乖離と捉えることができるのかもしれない。作業療法はその職務内容から結果が見え難く、特有の技術・技能として捉えづらいために、職業的アイデンティティを得難い<sup>17)</sup>。この傾向は学生のみならず、臨床作業療法士でも職業アイデンティティの危機を生じる可能性が懸念されている<sup>18)</sup>。こうした混乱がSV自身にも存在しうることを前提として学生が職業アイデンティティを得るためには、臨地実習でSVのスキルや考え方に触れ、その業務内容に対する自分なりの確信を得るか否かが重要と考えられる。今回SVとの関係性で「SVの人間性に対する思い」のなかの小カテゴリーに「自己研鑽の姿勢」や「社会人として尊敬しうる要素の発見」が挙げられたことから、信念を持って職務に従事するSVの姿が、医療従事者としての社会人モデルを学生の中に構築していた可能性がある。これは将来のSV像に挙げられたラベルからも示唆されており、直接受けた指導内容やSVの姿勢が、良きにつけ悪きにつけ現時点での学生の将来像に影響を与えていると捉えることができる。

## V 結論

今回の研究により、A大学作業療法学科の総合臨地実習経験から自己成長感を涵養する成因を得た。結果から、臨地実習は学生自身の知識・技術の不足をはじめとした自身の問題点に気づく機会となっており、この気づきや変化を実感することが自己成長感につながる可能性が示された。患者やSVとの関係性づくりでは、学生は概ね冷静に

関係性を捉えて行動しており、特にSVとの間では信頼関係構築のための精神的な環境づくりを求める傾向があった。また自己成長感の涵養により自身の働くイメージが確立されていくことが示唆され、その将来像にはSVから受けた指導内容や指導姿勢が影響を及ぼすと考えられた。

本研究の限界として、今回のFGIの参加者は特定の大学に所属する少数の学生からの意見を分析したものであるため、サンプルサイズが小さく一般化することは難しい。また実習を通じてどのくらいの変化があったと学生が捉えているかは不透明である。今回の結果をもとに自己成長感尺度を作成し、実習前後の変化を定量的に調査する研究として発展させていきたい。

**謝辞：**FGIにご参加いただきましたA大学作業療法学生と、FGI運営にご尽力いただきました作業療法士の櫻原麻衣さんに深くお礼を申し上げます。誠にありがとうございました。

本研究の実施ならびに論文作成にあたり、平成22年度首都大学東京傾斜的研究費(部局分・若手奨励経費)の補助を受けた。

## 文 献

- 1) 沖野良枝, 徳川早知子, 皆川美代子他: 臨床実習における学生の不安・悩みの現状と指導者・教員の関わり. 重県立短期大学学術雑誌, 48: 117-112, 1995.
- 2) 信野良太: 自己成長感尺度作成の試み. 北星学園大学大学院論集, 11: 125-136, 2008.
- 3) 辻田大輔, 入山茂美, 高橋美和: 看護教育研究 看護学生の実習達成感と職業的アイデンティティの関連. 看護教育, 52(1): 42-46, 2011.
- 4) Farkhondeh Sharif and Sara Masoumi: A qualitative study of nursing student experiences of clinical practice. BMC Nursing, 4(6), 2005.
- 5) 水木暢子, 木村千代子, 佐藤純子: 臨床実習における看護学生の看護実践活動に対する自己効力感の検討. 秋田看護大学地域総合研究所研究所報, 3: 15-22, 2008.
- 6) 武田要, 藤沢しげ子: 理学療法学科学生の実習成績と情意特性. 理学療法科学, 21(2): 131-135, 2006.
- 7) 佐々木千尋, 里村恵子: 学生が臨床実習に抱く満足に関する要因の分析. 作業療法教育研究, 9(1): 4-12, 2009.
- 8) 田上義之, 渥美恵美, 高橋千賀子: 実習後のアンケート結果から把握できた臨床実習Iの実態. 東北文化学園大学紀要, 4(1): 45-53, 2008.
- 9) 落合幸子, マイマイティパリダ, 紙屋克子他: 医療系大学生の実習からの学び尺度作成への試み. 茨城県立医療大学紀要, 11: 79-88, 2006.
- 10) 湯浅孝男, 石井奈智子, 石井良和, 石川隆志: 作業療法教育における面接技法教育上の課題. 一学生へのフォーカスグループインタビューから考えられること一. 作業療法教育研究, 7(1): 14-21, 2007.
- 11) 長谷川正哉, 越智淳子, 沖田一彦: 臨床実習指導の効果に影響を及ぼす因子の検討(第2報)一学生に対するフォーカスグループインタビューの分析結果から一. 理学療法の臨床と研究, 14: 31-34, 2005.
- 12) キャサリン・ポープ, ニコラス・メイズ編, 大滝純司訳: 質的研究実践ガイドー保健・医療サービス向上のためにー, 第2版: 27-36, 医学書院, 東京, 2008.
- 13) 村田和香: OT学生は臨床実習後にどのように職業的アイデンティティを高めているのか. OTジャーナル, 43(3): 217-222, 2009.
- 14) 狩野力八郎著, 福島統編: 医療面接技法とコミュニケーションの取り方ー医療面接で困難なケースー, メジカルビュー社, 80-105, 2003.
- 15) 栗原幸江: つながりと理解を深めるためのコミュニケーションー医療ソーシャルワーカーの立場からー. 緩和医療学, 9(1): 21-27, 2007.
- 16) Mehrabian A: Silent messages, Implicit Communication of Emotions and Attitudes, 2nd Ed., Wadsworth Pub. Co., 1981.
- 17) 本多陽子, 落合幸子: 医療系大学生の進路決定プロセス尺度作成の試みー進路決定プロセスの類型と職業的アイデンティティからの検討ー. 茨城県立医療大学紀要, 11: 45-54, 2006.
- 18) 長谷龍太郎, 落合幸子, 野々村典子他: 作業療法士の職業的アイデンティティ研究の展望. 茨城県立医療大学紀要, 6: 47-56, 2001.

---

**Abstract** : In order to clarify how clinical training fosters a sense of personal-growth in occupational therapy students, we conducted focus group interviews of 10 occupational therapy students following clinical training. The results revealed that clinical training provided students with the opportunity to notice their own lack of knowledge and skill, personal traits, and communication pattern. Awareness of these qualities and change may be linked to sense of personal-growth. When establishing relationships with patients and supervisors, students mainly handled relationships dispassionately and tended to cultivate a psychological environment for building trust with supervisor. Our findings suggest that students established a working image of themselves through the cultivation of their sense of personal-growth, and guidance from supervisors might affect their vision with regard to job content.

**Key words** : occupational therapy, students, clinical training, personal-growth, Focus Group Interview

(2011年6月22日 原稿受付)